

郷土館だより

V o 1. 12. No. 2

1990. 3. 15

子供郷土館教室

『初めてのハタオリ体験』

三島市内の小中学校が休日となる6月27日(火)は「郷土の日」でした。郷土館ではこの日「子供郷土館教室」を開き、多くの子供達や父兄に郷土三島を知る時間を持ってもらいました。

今回は市内東本町在住の染織工芸家、井上一雄先生によるハタオリ指導が主な行事となりました。

かつては、伊豆一円にわたり手機(テバタ)が盛んであり、農家には必ずといっていいほどハタオリの音が聞こえていた時代がありました。今はもうハタを織れる人はほとんどおらず、こうした情景を知る人もわずかとなりました。

長く続いた衣生活を知る一端として子供達にハタオリに挑戦してもらいました。



▲ハタオリ指導にあたる井上先生

まず井上先生が昔の衣生活(糸をひく・染色する・ハタを織る)の話をされ、次いで子供達が順番に2台のハタを織りました。1人わずか3分程度でしたが、杼で横糸を通し^{おさ}炭を打ち踏み木を動かすという一連の動作により、「トントン、カラリ」の音と共に布が織れていきました。初めは杼道(横糸を通す空間)が開かず杼が通らないでまごつく子供もいましたが、前の人の様子を見ている内に、皆どんどん織れるようになりました。この日、約270人の子供達がハタオリ体験する事ができました。

他に、映画「つるのおんがえし」「歴史を調べる」を上映し、企画展「三島宿本陣史料展」の会場では、三島宿や本陣関係の展示を見ながら、説明を聞き、三島宿の時代に思いをはせました。





ふるさと 講座

女性を対象としたふるさと講座
 今年は、染織体験講座(3回)を中心
 に、三四呂人形作り、講演(戦
 国の人「春日の局」)という5回に
 わたる、充実したものとなりました。

(1)三四呂人形作り (10月5日)

三島のみやげものとして親しまれている三四呂人形を製作されている四条悦子さんのグループに指導をお願いしました。(写真上)

初めに、二階に展示されている、野口三四郎の製作したオリジナルの三四呂人形を見学し、人形が誕生した経過や、作品の説明を受けました。

オリジナルの三四呂人形が主として張り子の技法を用いているのに対し、四条さん達は

オリジナルをモデルに素焼の型を作りその上に和紙を張り彩色をほどこすというもので量産が可能になりました。

石州和紙を用い色彩もオリジナルに似せるよう気を遣い、素朴な味わいある人形となっています。

型に紙を張る時にしわにならない方法、色が混ざらないようにする手法など、細かい指導により、可愛らしい三四呂人形「里子」を作り上げる事ができました。



◀ コマを使つての糸つむぎを指導する井上先生

(2)染織体験講座 1 「つむぐ」 (11月9日)

3回にわたる井上一雄先生の染織体験講座を始めるにあたり、まず日本の衣生活の歴史を解説されました。長く続いた手作業による「つむぐ・そめる・おる」生活が近代繊維工業に圧迫され衰退したこと、それはつい最近まで身近にあった生活であり、特に女性と関係の深いものであった、と語られました。

「毛糸つむぎ」の実演では、中性洗剤で洗った羊毛をハンドカード(短い針金が並んでいる1組のもの)に引っかけながら毛筋をそろえます。用意されたハンドカード10組を使い全員が羊毛をととのえました。

この羊毛をコマの形をしたより車にかけ毛糸を作ります。10個のより車を使いながら受講生も挑戦しましたが、毛糸が太くなったりコマが落ちたり大さわぎでした。(写真左)

次にイギリス製の足踏み紡毛機(3台)を

使い毛糸を作りました。これも不慣れなため、毛車を反対に回したり、よりをかけすぎたりして、なかなか難しいようでした。

最後に井上先生が収集された世界の羊毛や毛紡ぎ糸の展示を解説され、スウェーデンの毛糸つむぎが人々の生活に密着している事など詳しく話されました。

(3)染織体験講座 2 「そめる」 (11月16日)

井上先生は「赤染めの話」から始められました。赤色に染色するのは昔から難しく、日本で古来用いられているのは「茜染め」「紅花染め」「べんがら」がありました。

「あかね染め」は最も有名ですが、大量の原料と手間がかかります。1反(300g)染めるのにはあかね草70kgも必要とし、その根を染めに用います。根を清水で何回も洗い、うすいおかゆに一晩つけて黄色の色素を取り去った後煎じます。布を染液につけた後、櫛の灰汁で媒染すると美しい「茜色」になります。

このように赤染めの原料、工程の違いを説明された後、それぞれの糸染めのサンプルを渡し、微妙な色の違いを味わいました。

次いで伝統的な日本の草木染の話をして、ひき続いて草木染の体験学習に入りました。白布を、染液(小鮎草ともみじの葉、又は茶の木と萩)に浸し、よくしぼり広げて風を通し媒染液(みょうばん・第一酸化鉄)に浸すという作業をくり返すと、あたたかい浅黄色やねずみ色に染め上がりました。

(4)染織体験講座 3 「おる」 (11月30日)

「機織」とは経糸と緯糸の織りなす業(技)という話から始まり、非常に原始的な織機を手元で示しながら、現在の手機への移行を語られました。先生がまとめられた労作「手機に生きた明治の女たち」のテキストから戦前の伊豆地方の女性の機織り生活について詳細に解説され、実際の手織の作品や柄見本を示しながら手機の奥深さと共にそこに生きた女性像にも触れられました。

井上先生が調整された4台の手機を使い機織り体験しました。井上先生のトントンカリというリズムカルな実演を見た後、4台の



▲手機を織る受講生

手機に向かいました。杼を通し箆を打ち足を踏み変えるという一連の動作が、始めはまごつきながら、次第に慣れてできるようになりました。4台の機からは次々おもしろいように布が織れてゆき、現代の織り姫たちは大喜びでした。(写真上)

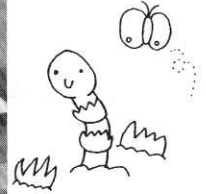
(5)講演「戦国の女—春日局」 (12月14日)

歴史上の女性を語るには、この方をおいてないといわれる、三島市文化財保護審議委員の長谷川福太郎先生をお招きして、NHK大河ドラマでもとり上げられた「春日局」(おふく)の人間像について語っていただきました。

おふくの生涯を不遇期(3~5才)、後妻記(16才~24才)、乳母期(25~46才)、権勢期(47~64才)に分け、戦国の世の波乱に富んだ前半と大奥総取締役として権力を思うがままにした後半生を語り、最後に「勝ち勝ち負けた」春日局のような生き方は絶対まねてほしくないと言われました。

▼「春日局」を「かわいそうな女」と語る長谷川先生





子供たちに大人気だった

企画展 塚田コレクション「世界のちょう展」

1989. 7月20日～9月30日

世界中の珍しい蝶3,000頭が一堂に集まり、夏休みの三島の子供たちの話題となりました。

貴重な蝶のコレクションを提供されたのは、塚田眞先生（医師、三島市泉町5-3）です。

塚田先生は子供のころから蝶に魅せられ、蝶を追いかけて野山を走り回ったそうです。そのころは、今と異なり自然も豊かで、箱根まで登ってアサギマダラの群生に出会うなどのこともしばしばだったようです。先生の収集はこうした若い時代に始められたものです。

展示した世界の蝶には、次のような珍蝶・奇蝶が有って話題となりました。

オオカバマダラは数千万頭もの大集団を形成し、なんとカナダからメキシコの3千メー

トルの高地までを何千キロも移動する蝶です。

フクロウチョウはその名前のおり鳥のフクロウにそっくりです。ただし羽根の裏側の模様です。敵におそわれそうになった時、羽根をぱっと広げてフクロウの目玉顔を見せるのだそうです。

このように世界の蝶を見てもらいながら、子供たちには自然を大切に、それを守る心を養ってもらいたいものだと思います。

区分	月	(12日)	(31日)	(29日)	(72日)
	7月20日～31日	8月	9月	計	
学生(小,中,高)	930	4,750	2,067	7,747	
一般(個人)	1,515	6,620	4,215	12,350	
団体(30人以上)	0	(4) 185	(6) 275	(10) 460	
合計	2,445	11,555	6,557	20,557	

世界のちょう展入館者数

郷土館「夏の映画教室」報告

恒例になりました郷土館「夏の映画教室」が、去る7月30日(日)から8月2日(水)まで4日間行われました。

今年は、企画展「塚田コレクション世界のちょう展」に合わせ、映画内容は、

午前「翔べオオムラサキ」(カラー49分)

午後「アゲハチョウ」(カラー20分)

の2本を上映しました。

入場者数は、

7月30日(日)ー40名

7月31日(月)ー34名

8月1日(火)ー9名

8月2日(水)ー45名の計128名です。

8月1日は、雨天の為、人数は少なかったのですが、全般に2本の映画とも企画展との関連深い内容、また夏休みでもあるため親子連れ、あるいは友達どうしで来館し、好評のうちに終了しました。

しずおか文化の祭典'89 参加の企画展

「三島のあけぼの展」

1989, 10月30日～'90, 1月31日



◀展示風景

▼三島のあけぼの展入館者数

	(2日)	(30日)	(23日)	(29日)	(84日)
	10月30,31日	11月	12月	1月	計
学生 (小中高)	30	2,273	713	2,010	5,026
一般 (個人)	200	6,242	2,237	4,045	12,724
団体 (30人以上)	(1) 80	(18) 890	(10) 385	(15) 638	(44) 1,993
合計	310	9,405	3,335	6,693	19,743

三島市では、箱根西麓地域をはじめ、中郷の水田地域や現在の市街地にいたるまでの地域のほぼ全域に、475ヶ所もの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。三島は歴史の宝庫の町と言えます。

平成元年度の秋の企画展「三島のあけぼの」では、三島市教育委員会が昭和61年以降行ってきた約50回の発掘調査から、各時代ごとに特徴ある遺跡と遺物を選び展示しました。

旧石器時代から江戸時代までを8時代に区切った各展示コーナーの約400点のさまざまな遺物に、埋もれていた三島の歴史を見つけることができました。以下、各時代と展示した遺跡は次のとおりです。

1. 「土坑群を発見」
—旧石器時代・初音ヶ原A遺跡—
2. 「縄文人の狩猟、採集地か」
—縄文時代・観音洞遺跡—
3. 「方形周溝墓」
—弥生時代・青木遺跡(第2次調査)—
4. 「平地の集落」
—古墳時代・安久遺跡—
5. 「重なる住居跡群」
—奈良、平安時代・中島上舞台遺跡—

6. 「三島明神の遺物」
—鎌倉時代・三嶋大社境内遺跡—
7. 「兵どもの夢の跡」
—室町時代・山中城—
8. 「脇本陣跡の発掘」
—江戸時代・山中宿—

3階常設展示の

ころもがえ

3階の常設展示を一部新しく入れ替えました。

「三島のあけぼの展」の終了を機に、従来の考古学展示を撤収し、代わりに「あけぼの展」で展示していた新しい発掘資料を入れました。

旧石器時代に始まる展示順路は今までと同様ですが、その中でも特に新しく入れた資料は山中城関係の発掘品です。建物の柱などの木製資料や兵士たちが使用したものと思われるキセル・銭・武具の一部など、中世のいぶきを感じさせる資料ばかりです。

郷土館では、今後このように、新しく発掘された埋蔵文化財の展示紹介を続けたいと考えています。

ご来館をお待ちしています。

「歴史講座」

～ 伊 豆 を 掘 る ～

平成元年10月～2年1月にかけて毎月第1土曜日に5回にわたり歴史講座を開講しました。

「伊豆を掘る」をテーマに、古代から中世の伊豆について、各専門の先生の講演を59人の市民が受講しました。内容を紹介します。

(1) 「箱根に人が住み始めた頃」

沼津歴史民俗資料館学芸員 瀬川裕市郎氏

「考古学の目的は過去の人々の生活の実態を明らかにすることである。」ということで、その方法として遺跡・土器・石器等の数にこだわり、静岡県と近隣の比較検討をされました。

結論として、静岡県内の遺跡は他県のものと比べると一軒あたりの土器の数が少なく、人口も多くなかったようです。又住居も小さく、仮設的なものが多かったようです。

箱根山麓では、土器となる良質な粘土や、石器となる石も少なく、人の動きが激しくなかった一つの要因であったようです。



(2) 「古代国家形成期における伊豆

——横穴群を中心として」

静岡県文化財保護審議委員 長田実氏

横穴は古墳時代以降の~~無名~~墓であり、横穴を研究することにより、当時の家長を中心とした家族構成・社会構造がわかります。

伊豆に横穴が作られた7世紀の頃、初めて伊豆に支配層が出来、独自の政治形態を持ったと推定されます。

北伊豆に点在する横穴を解説され、最後に大北横穴群（伊豆長岡町）について詳しく触れました。この古墳群では「若舎人」銘入りの石櫃と、火葬骨の多さに注目されました。

日本での火葬の始まりは文献上では8世紀からですが、「若舎人」銘のものはもっと古く7世紀末と考えられます。ここに火葬された人物は中央で相当地位が高く、諸説ありますが、皇太子にはべった舎人と思われる。

北伊豆の中世城館跡一覧表

(中野国雄先生作製資料より)

番号	城館跡名	遺構	番号	城館跡名	遺構
1	蕪山城	曲輪.堀.土塁	19	物見山	
2	大仙山城		20	泉頭城	曲輪.堀
3	柏谷城		21	堀之内	
4	仁田館	堀.土塁	22	高田屋敷	土塁
5	大平新城	曲輪.堀	23	見付	
6	岩崎砦	曲輪.堀	24	岩崎屋敷	
7	鷲津山砦		25	高橋屋敷	
8	獅子浜城	曲輪.堀	26	三枚橋城	
9	城山	曲輪	27	三枚橋出城	
10	松下館		28	谷田城	曲輪.堀
11	三津城	曲輪.堀	29	川原ヶ谷城	曲輪
12	長浜城	曲輪.堀.土塁.石垣	30	伊豆徳倉城	曲輪.堀.土塁
13	手城山	曲輪.堀	31	丸山城	
14	横城		32	山中城	曲輪.堀.土塁.土橋
15	天神山砦	曲輪	33	長久保城	曲輪.堀.土塁
16	湯川砦		34	南一色城	曲輪.堀.土塁
17	駿河戸倉城	曲輪.堀	35	天神山砦	
18	出城	曲輪	36	熊堂砦	

火葬骨の多さは、伊豆がこの頃中央集権国家に完全に組み込まれ、相当仏教が普及していたことが伺えます。

(3)「北伊豆を中心とした北条の城」

裾野市史編纂専門委員 中野国雄氏

戦国時代の北伊豆の城・居館跡は36あり、葦山城をはじめ各城館の解説をされました。

(P 6 下図表参照)

中世の城の特徴は、山の端の半島状の丘陵を切り郭とした規模の小さなものでした。城の役目が終わると建物、堀はこわされるため、後世に明瞭に残るものは少ないのですが、山中城は戦後処理されなかったため、中世の城の様子がよくわかります。

山中城を築城した後北条氏は、城郭技術に特にすぐれ、粘土ローム層に作られた「畝掘り」は後北条氏特有のものです。

(4)「伊豆水軍と黒潮文化」

郷土史研究家 永岡治氏

伊豆には古くより海賊＝水軍と呼ばれる海を舞台として商業・貿易活動を行う者がいました。支配者から非合法扱いされましたが、体制のワク内に入ることを拒み、自由に生きる事を選んだ者でした。

戦乱の時代には支配層から戦力として利用



▲中世の東国で大活躍した「伊豆水軍」について語る永岡先生

され、源平の合戦の時には、石橋山の合戦で破れた頼朝を土肥水軍が安房へ逃がしたのが歴史に登場する最初でした。

南北朝期には、西伊豆～南伊豆に水軍が割拠し戦力を誇っていました。

戦国時代には、北条早雲の家臣団に組み込まれ、重く用いられました。彼等北条水軍は安宅船あたかを作った戦いやゲリラ戦を得意とし、東日本で最強を誇りました。

北条氏滅亡後、彼等は伊豆の本拠地に戻り、子孫は小笠原諸島の開発や幕末にディアナ号の建造に参加しています。

「昆虫(ちょう)の観察」

— 標本作りと採集 —



伊豆の昆虫に詳しい中村浩三先生(三島市教育委員・元御殿場高校校長)を講師に、夏休みの8月10日、小学生(4年～6年)22人がチョウの採集と標本作りにいどみました。

午前中は、郷土館で、チョウの生態と変化の話聞いた後、展翅板を使い実物のチョウの標本作りました。次に「世界のちょう展」を見学し、中村先生より特徴あるチョウの話をついた後、箱根山中へバスで登り、午後には東海道を下りながらチョウの観察と採集を行いました。スジグロシロチョウ、シロチョウ、ジャノメチョウ、アオスジアゲハ、モンキアゲハなど数多くのチョウを観察することができました。しかし、動きが素早いチョウばかりで、採集はなかなか難しいようでした。

縄文土器作り教室



夏休みの3日間、小学4～6年生36人が、縄文土器作りに汗を流しました。(写真左)

7月25日「土ねり」。縄文土器の成分に近づけるため、箱根山の赤土1kg、砂1kg、粘土(テラコッタ)2kgに少量の水(コップ2杯ぐらい)を加え、約2時間練りました。

7月27日「成形」。粘土から、縄文土器の形を作りました。円盤状にした粘土の底部の上に、紐状にした粘土を一段一段輪積みにしよく粘着させ、下から上へと作りました。形が出来上がると、文様をつけますが、縄文・型押しその他、ユニークな文様がつけられました。

8月23日「焼成」。完全に乾燥した土器に火を通し、縄文土器が完成しました。この「野焼き」が縄文土器作りの特徴ですが、3m四方の範囲を丸太で囲み、この中で一度マキを燃やして地面を乾燥させ、オキを作ります。この上に土器を置き、その上に大量のマキを積んで約2時間燃やすと、赤褐色の、個性的な土器の出来上がりです。

「おかざり作り」講習会

年末に催される恒例の「おかざり作り」、今年も又22人の受講者でにぎわいました。

師走もそろそろ押し迫った12月10日(日)、市内川原ヶ谷在住の芹沢貫一先生と奥様が、指導にあたりました。

おかざり作りの第一歩はワラをなう事からです。ほとんどの人が初めての経験でしたが、何とか手のひらの上で、「右ない」「左ない」の細い縄を作りました。次いで、足を使って太い縄をナウやり方を教わります。これを丸くすると「荒神かざり」になります。次いでワラを足す方法などを教わり、ごぼうじめ、大神宮飾り、玄関飾りなど、次々に作り上げました。この間、芹沢先生や奥様の、にこやかな助言で、ワラをなうことが出来なかった人達も、立派な「お飾り」を作り上げました。ユズリハ、ウラジロ、ダイダイ、御幣を飾りつけ、正月を迎える準備もとのいました。

「うまくできたかな」
受講生の間で

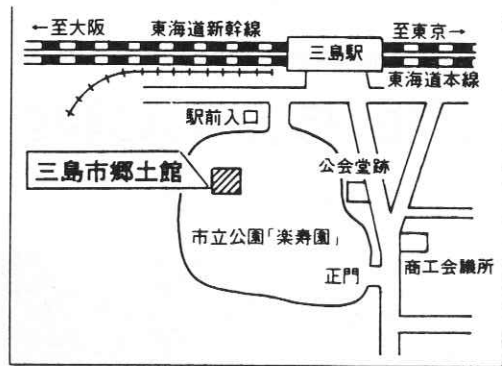


利用案内

休館日 毎月第2月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料(但し、楽寿園入場は、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立楽寿園内

郷土館だより No.35

平成2年3月15日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会